

<p>事案名</p>	<p>留萌市の事案（北海道1-6）</p>
<p>分類</p>	<p>廃棄・遺棄 発見・被災・掃海等処理 現在の状況</p>
<p>資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・証言〔1〕 ・「厚別弾薬庫 開設10周年記念誌」昭和38年2月1日〔2〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成6年8月10日〔3〕 ・「るもい再発見」〔4〕 ・『読売新聞』平成15年9月2日〔5〕 ・『北海道新聞』『毎日新聞』平成15年9月3日〔6〕 ・『朝日新聞』平成15年9月4日〔7〕 ・証言〔8〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成15年9月5日〔9〕 ・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査に係る留萌の事案について」平成15年9月24日〔10〕 ・『北海道新聞』（留萌・宗谷版）平成15年9月25日〔11〕 ・『日刊留萌』平成15年9月26日〔12〕 ・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔13〕
<p>資料内容概要</p>	<p>終戦時、陸軍兵器補給廠が保有していた毒ガス弾等は、米軍進駐までに、旧軍により小樽湾に海洋投棄及び北海道留萌市内の廃坑に埋設し、爆破処理された。</p> <p>廃棄・遺棄情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元陸軍兵器補給廠厚別常駐班の曹長の証言によれば、「昭和20年8月18日から20日頃までに、陸軍兵器補給廠厚別常駐班保有の毒ガス弾（くしゃみ剤貨車約5輛分）を、証言者の指揮の下、留萌市内の廃坑内に詰め、爆破処理した」と記載されている〔1〕。 ・終戦時に、厚別弾薬庫では9月17日の米軍進駐迄に終戦処理が行われ、「貨車7輛分に及ぶ大量の催涙ガス弾は小樽沖と留萌沖において海中処分を凶った」が、小樽沖では浮いて沈まない缶を沈ませようとしていたところ、缶が発火して全体に着火し、作業をしていた見習士官数名が死亡した。このため、海中投棄の計画を急遽変更し、留萌市内の廃坑に入れ爆破処分したと記載されている〔2〕。 ・新聞記事によれば、証言者は、昭和20年夏に証言者の父親ら地域の人たちがトラックで運ばれた木箱を何度も留萌市郊外の山中に運び込んだ後に爆破された。その後付近の道路に差しかかる度に目がチカチカして涙が出たり、くしゃみ、鼻汁が出て、のどが痛くなった。山中のアカダモの木がほとんど枯れてしまったとのこと。また、別の住民は、「終戦後、時期はは

っきり記憶していないが、『峠下地区に催涙ガスのようなものが漏れているとの情報で調査に来た』という道の職員を現地に案内したことがある」と証言している〔3〕〔4〕。

- ・新聞記事によれば、北海道が元陸軍関係者から、札幌市内の爆薬庫に「くしゃみ弾」が貨車7輦分あり、「そのうちの5輦分を留萌市内の廃坑に埋めて爆破し、2輦分は小樽市内の祝津港沖に投棄した」との証言を得ている〔5〕〔6〕〔7〕。
- ・住民の証言によれば、「昭和20年11月頃に、妻から留萌市内の廃坑内で毒ガスを廃棄したとの話を聞いて爆破処理現場を訪れてみたら、坑道口から入ると整然と並べられた木箱やジュースの空き缶のようなものが散乱していたが、いずれも中身は吹き飛んでいて無かった。坑道の中にはガスが残っていたので、くしゃみや鼻水等に苦しんだ」と記載されている〔8〕〔9〕。

発見・被災・掃海等処理

- ・昭和37年6月12日に、北海道留萌市で、くしゃみ性ガス（弾）が1本発見され、自衛隊が爆破処理したと記載されている〔13〕。

現在の状況

- ・留萌市内の廃坑でくしゃみ弾を爆破処理した場所を特定し、9月18日に、周辺地区の環境影響を調査するため、河川水（沢水を含む）地下水（飲用井戸）の水質調査をおこなった。その分析結果において、ヒ素濃度は、いずれの地点も環境基準値を下回った〔10〕。この結果は各紙で報道されている〔11〕〔12〕。